九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

立候補する文学者 ： 菊池寛の選挙戦をめぐって

楠田, 剛士
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

https://doi.org/10.15017/8491

出版情報：九大日文. 6, pp.44-58, 2005-06-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

立候補する文学者
――菊池寛の選挙戦をめぐって――

楠田剛士（KUSUDA Tsuyoshi）

1

選挙に立候補する文学者がいる。ここでいう「選挙」とは、大日本帝国憲法あるいは日本国憲法に示された選挙法に基いて実施される選挙を指す。「文学者」を小説、詩歌、戯曲の作者に限らず、思想家、新聞人、出版人等も含めて広義にとらえてみると、すでに明治二十三年の第一回衆議院議員総選挙（投票日七月一日）から立候補する文学者（例えば中江兆民、植木枝盛、東海散士ら）を見ることができる。それ以後、文学者の立候補はたびたびメディアに取り上げられながら現代に至る。〈立候補する文学者〉について考える上で、ひとまず「選挙」と「文学者」をそのようにとらえておきたい。

選挙において、文学者は多かれ少なかれ自己の政治意識を表現することになる。それは具体的なテクストとして現れる場合もあれば、選挙に関わらないという形で現れる場合もあるはずである。選挙という現象に注目することで、従来の「文学史」では焦点化されない文学者の政治的言説をとらえながら、いわゆる『『文学』と『政治』」という問題を、より開いた形で（再）問題化することが可能ではないだろうか。

また選挙活動中、文学者は作品の読者と直に接触することにもなる。作品を媒介にした作者と読者の関係が、選挙において候補者と有権者の関係に置き換えられる時、政治的力学による言葉の位相が問題になるだろう。そのような角度から文学的言説の諸問題――例えば出版、流通、消費などの問題――を考えてみたい。

〈立候補する文学者〉は明治時代から現代まで存在するため、ここで順を追って検証していく余裕はないが、本稿では菊池寛の選挙をめぐる問題を追求してみたい[1]。理由は、彼が作家としての実力と社会的な話題性という点で、同時代の文学者候補の中でとりわけ注目を集めた人物の一人だからである。また「文学史」的に、菊池寛の同時代における「『文学』と『政治』」の問題とは、まずプロレタリア文学者の言論活動が想起されやすいと考えられるが、そうした「『文学』と『政治』」の枠組みからもれてしまう文学者の政治意識をとらえる上でも、菊池寛を取り上げる意味は小さくないはずである。

彼はそれまでに選挙について次のように述べていたことがあった（引用文中の傍線はすべて引用者による。以下同）[2]。

> 現在の政界の状態では、たとひ我々文学者が議会には入ることがあつても、不真面目な議会から笑ひ物にされ、新聞にからかはれて余興的な景物になるより外はないと思

ふ。そんな意味で、現在の政治界と直接な交渉を持たうとするが如き愚劣であると思ふ。それよりも、将来普選が行はれ議会がもつと知識階級化され、合理的になり、思想的になつた場合に、文壇から代表者を送つても遅くないと思ふ。たゞさうした場合に、文壇が一の思想的団体として、働き得るやうに今から文学者全体が団結して一の思想団体として結合して置くことが必要であると思ふ。

今に社会が、もつと混乱すれば、我々が安閑として文筆丈を取つて居られない時代が、きつと来ると思ふ。そんな場合に、我々全体が我々の云ひ分を、有力に主張し得ると云ふことは、我々のためにも、社会全体のためにも、必要なことだと思ふ。文学者は口を開けば「結局我々ほど物の分つてゐる者はない」と云ふ。それほどの自信があるならば、その物の分つた意見なり主張なりを、政治問題社会問題に発表することは、一の義務であると云つてよい。そんな意味で、将来有力な著作家組合、小説家組合が完成され、政治問題なり社会問題なりについて、活躍するやうになることは、社会全体のためにも、どれほどいゝことだか分らないと思ふ。

（「文壇の政治趣味」、「文芸春秋」大13・7）

文学者の政治参加が訴えられているが、なぜ彼が大正十三年頃にこのようなことを述べていたのかについては後で触れることになるので、いまは深く言及しない。ここでの菊池の主張（公約）の一部は、文壇においては、小説家協会と劇作家協会とを合併した文芸家協会の設立（大正十五年一月）、「文芸春秋」紙上の座談会記事や文芸講演会の開始（同年二月）という形で実現されたといえるだろう。では選挙ではどうだったのか。

2

菊池寛は第十六回衆議院議員総選挙（投票日昭和三年二月二十日）に立候補した。この選挙は、大正十四年に全面的に改正された衆議院議員選挙法（法律第四十七号）による、最初の男子普通選挙であった[3]。菊池は東京府第一区（麹町区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区）、社会民衆党から立候補し、結果五六八二票を得たが、候補者十五名中七位（定員五名）で落選した。彼の立候補の経緯について、もっとも早い時期に伝える新聞記事には次のようにある（引用文中の括弧はすべて引用者による。以下同）。

出る幕ぢやないと思つたから昨日（二月二日）まではお断りして居たんですが余りに熱心なお勧めで動きだしたわけです、議会に文芸家の席が一つも無い歎きから救ふだけでも理由になる私に郷里へ帰れば問題無く自信がありますが、東京で起つのだから読書階級と文芸愛好家と民衆党関係の人々の応援に待つばかりです。文書戦は望むところ久米、山本、近藤、金子等の諸君は無論有力な応援者ですが、ポスターでもビラでも変つたそれ〴〵の専門家がグループ

から飛んで出ます費用は私は持たぬが友人も挙つてだしてくれるし近く出版する本もあり、事は欠きません、僕一個としては一般文芸家の代表として検閲制度の改善、出版法著作権法の改正に力をつくしたいと思ひます

（「東京朝日新聞」昭3・2・4）

これは次の三点に整理できる。

A――社会民衆党から熱心な出馬依頼があったこと。

B――東京から立つことで文学者たちと「読書階級と文芸愛好家と民衆党関係の人々」の応援（による当選）が期待できること。

C――選挙公約として「検閲制度の改善」と「出版著作権法の改正」を打ち出していること。

この三点を視座として選挙戦を見ていく。

まずAについて。選挙の公示は一月二十三日に行われているが、菊池が正式に立候補を表明するのは二月三日のこと（届出は四日）。菊池が立候補した時点で、すでに多くの候補者が選挙戦を始めていた。彼らに比べて出馬が遅れたのは、社会民衆党からの依頼を二度断っていたからである[4]。それが「三度熱心に勧められたので、到頭やつて見る気になつたのである」（「立候補について」、「文芸春秋」昭3・3）という。社会民衆党との関係については「安部さん（安部磯雄）がフェビアン協会を組織してゐたときに、たとひ名義だけでも参加してゐたことと、民衆党創立のときに、入党を勧誘されたことだ。だが、何だか差し出がましい気がして、参加しなかつた」（同上）と説明している。

社会民衆党というのは無産政党のひとつである。増島宏・高橋彦博・大野節子『無産政党の研究―戦前日本の社会民主主義―』（法政大学出版局、昭44・3　一頁）によれば、「一九二二年、ロシア革命と米騒動の影響のもとで、日本共産党が創立された後、いくつかの合法的社会民主主義政党がつくられた。これらは、当時の支配階級の政党（政友会・憲政会など）を既成政党とよぶに対し、「無産政党」とよばれた」という（括弧は原文）。最初の男子普通選挙は簡単にいえば、既成政党対無産政党という構図で争われた。言い換えれば、ブルジョアジーとプロレタリアの対決、あるいはブルジョア文学者とプロレタリア文学者の対決だった。菊池はこれまでブルジョア作家と言われてきた自分が無産政党から立候補することは「最適任でない」（「立候補について」）と認める。その一方で、無産政党を「現代の大義名分」（同上）や「錦の御旗」（同上）としてとらえ、「三度呼びかけられた以上、たとひ自分が適任でないことが分り切つて居ても、応じないことは、何だか男冥利に尽きるやうな気がした」（同上）といい、立候補の正当化を図る。

この社会民衆党からの立候補がプロレタリア文学者たちの批判的になった。例えば「中央公論」（昭3・3）では「政治家としての菊池寛氏」という小特集が組まれているが[5]、村松正俊は「政治家的非政治家」の中で、「従来ブルジョア文芸の総大将だと思はれてゐた」菊池が無産政党候補者になったことに驚きを隠さない。そして「社会民衆党は菊池氏を容れる事に依

つて、それの本質がプチブルである事を暴露」し、「菊池氏の政治的意味は無産政党に入る事に依つて殆んど何物も加へないのである」と結論する。一方、高畠素之は同じ特集の中で菊池の立候補を多少揶揄しながらも、「無産政党とは浮世を忍ぶ仮りの名、民政党支店として革新党あたりと優劣を競ふ民衆党のことであるから、（略）菊池君を公認したところで、私は決して人間錯誤だなどとは考へない」（「士族の商法」）と述べる。村松にとって菊池の態度は〈錯誤〉に見えるが、高畠にはそう見えないというのである。これは一体どういうことだろうか。

この問いに答えるためには、無産政党の問題について、もう一歩踏み込む必要があるだろう。無産政党は社会民衆党の他に日本労農党、労働農民党等があるが、ここではそれぞれについて詳述はせず、社会民衆党結成までの経緯と党の性格を少し詳しく見ておくことにする。

3

普選を要求する声は、第一次世界大戦後に無産階級や知識人に増え、既成政党の内部にも表れるようになった[6]。先に見た菊池の政治参加の主張は、このような時勢の中で発言されたものである。普選要求が活発化する中で、大正十二年十二月十八日に政治問題研究会が組織された。この研究会は、さらに無産政党創立の推進を目的として、政治研究会へと発展・改組した（大正十三年六月二十八日）。岡本宏が『日本社会主義政党論史序説』（法律文化社、昭43・11　一五二－一五三頁）の中で指摘するように、研究会は「インテリゲンチャの集団」として発足し、「イデオロギー的多様性」を持っていた。

さらに岡本は、この研究会で一つのまとまりをなしていたのが日本フェビアン協会のメンバーであったという。協会は安部磯雄、石川三四郎、山崎今朝弥によって計画され、大正十三年四月二十七日に発足した（大正十四年十二月解散）。同年五月に機関紙「社会主義研究」が創刊され、その「発刊の辞」には協会の基本的な姿勢が示されている。

> 社会主義が空想として取扱はれた時代は過ぎた。人類は今社会主義が主張する提案の採否を決すべき時機に臨んでゐる。故に我々はその提案を実行的方面に於いて検討しなければならぬ、而して我々は今後主として言論出版の方法により、その結果を公表する。
>
> 我々の態度は飽迄も研究的である。現実的であると共に、合法的であり、漸進的ではあるが積極的である。
>
> 以上の理由により我々は新たにフエビアン協会を組織したのである。
>
> 我々はあらゆる社会主義思想にたいして寛容であることをも附言したい。同様の志向に立つものを徒に異端視し、思想のためにその人を拒むが如きは我々の本意ではないからである。
>
> 我々は我々の協会を名づけるにフエビアンを以つてし

た。しかし、我々は英国のそれとは何のかゝわりはない。ましてそれの模倣では断じてない。たゞ態度に多少の類似あると他に適当な名称がなかつたからと云ふに過ぎぬ。

我々は我々の協会が将来わが社会の上に何等かの貢献をなしうるものと確信したいのである。

日本フエビアン協会の機関として本誌を発行するに当り、我々は茲に協会設立の趣旨を明かにし以て発刊の辞に代へる。

協会はこのように研究的、現実的、合法的、漸進的かつ積極的で寛容的な態度を主張していた[7]。協会員の多くは政治研究会にも加入し、協会と研究会とは、いわば「姉妹関係」（「編輯後記」、「社会主義研究」大13・8）にあった。

協会の名称は明治十七（一八八四）年に設立されたイギリスの社会主義団体・フェビアン協会に由来している[8]。菊池もまた日本フェビアン協会員であった[9]。イギリス側で主導者的役割を担ったのがバーナード・ショーらであり、菊池はショーの作品を愛読していた。彼はショーについて、「私は戯曲家として愛蘭土の作家に教へられたことが多い。しかも小説家としても最も影響を受けたのは、バアナアド・シヨオの戯曲である。その物の見方、考へ方、人生観に於て、私が影響を受けた唯一の作家であるかも知れない」（菊池寛・山本修二『英国愛蘭近代劇精髄』新潮社、大14・9）といい、また自分が作家としてだけではなく、「殊に今でも私の人生観や社会観はショオの影響を蒙ること著しいものがある」（「雑書読みが道楽」、「サンエス」大9・4）ともいうように、一人の人間としてショーの思想に深く影響されていることを繰り返し認めている。

菊池は、安部や山崎らとは違って政治研究会には参加していない。だが政治研究会には協会のメンバーを多数含む右派があった。彼らは総同盟（日本労働総同盟）の右翼指導部と密接な関係をもっていたという（『無産政党の研究』二頁）。この研究会を含む諸団体によって無産政党組織準備会が開かれ（大正十四年八月十日）、労働組合団体の協力によって、農民労働党の結党大会が開かれた（大正十四年十二月一日）。この党は初の全国的無産政党であったが、即日結社禁止の弾圧を受け、解散を強いられた。

そうした事情を踏まえ、共産系を除外した形で大正十五年三月五日に労働農民党が創立することになった。だが、間もなく門戸開放問題（左翼労働団体の加入を認可するか排除するか）で党内に混乱が生じ、分裂してしまう。門戸開放に反対して脱党した総同盟、官業、海運、海運連盟を主体とし、独立労働協会の安部磯雄、赤松克麿、片山哲らが中心となって、大正十五年十二月五日に社会民衆党が結党する。

この党は社会主義運動の先駆者である安部磯雄、赤松克麿らを中心として、党の綱領を次のように掲げた[10]。

一、吾等は勤労階級本位の政治経済制度を建設する事を以て健全なる国民生活を樹立する所以と確信し之が実現を期す。

一、吾等は資本主義の生産並に分配方法に健全なる国民生活を阻害するものありと認め合法的手段に依て之が改革を期す。
一、吾等は特権階級を代表する既成政党並に社会進化の過程を無視する急進主義の政党を排す。

第一、二項に日本フェビアン協会の現実的・合法的・漸進的な考え方を見ることができる。また第三項では、既成政党への対立だけではなく、他の無産政党に対して反共産主義の構えを示している。その点が党の右派的性格を表している。社会民衆党は右派のメンバーを多く含みながら、日本フェビアン協会と深い関わりを持っていたのである。

よってショーの思想の影響下にある菊池寛が、フェビアン協会の思想をもつ社会民衆党から立候補することは〈錯誤〉ではない――むしろ彼の言葉を用いれば「最適任」だといえよう。総選挙までに、民衆党と同じく労働農民党から分裂した麻生久らが日本労農党を結成していたこともあり（大正十五年十二月九日）、「無産政党」と一口にいっても、実際は右派（社会民衆党）、中間派（日本労農党）、左派（労働農民党）に分裂し対立していた。そのために菊池と社会民衆党に対して、村松は強く批判し、高畠は「民政党支店」と皮肉るのであった。そうした無産政党同士の足の引っ張り合いがあってか、無産政党が社会的に注目を浴びたにも関わらず、当選者は八名にとどまった。

ちなみに菊池の社会主義に対する考えは、例えば「社会主義研究」の創刊号に寄せた「雑感三つ」という小文に表れている。

目的だとか理論などは誰にでも分つてゐるが、たゞ大事なのは目的に到達し、それを実行する、この手段と、方法とが、日本民族の此世紀の運命を決定すると云つてもよい。私は、理論や目的の講究のためにではなく、手段の研究にこそ、日本の知識階級のあらゆる智恵と良心とが働いて然るべきだと思ふ。

協会、そして民衆党と同様に、菊池も「実行」とそのための「研究」を重視する考え方である。これには「理論」を振りかざすばかりの、〈既成〉の社会革命家や社会運動家に対する反発がある。続いて彼らの貧しさを挙げ、「茲に、一人があり、本当に資本主義と戦ふ覚悟があるならば、先づ資本主義の社会へは入り込んで、金を儲けるのも策だと思ふ。（略）百万位の金を掴んでも、最初の素志をビクともさせない位の男でなければ、社会革命なんか出来るものか。また資本主義の社会へは入り込めば、百万円位の金は掴み得る位の機略がなければ、何うして天下の大事をリードすることが出来るか」（「雑感三つ」）という。資本主義体制の否定ではなく、その内側からの社会改革を主張している。こうした社会主義の考え方も他党のものとは相容れなかったし、選挙では他の無産政党から批判を受ける形になったのである。

また菊池は同じ文章の中で「社会革命とか社会改造とか、そ

んな希世の大御輿を担ぎ上げるのは、男子の快事である」と述べているが、これは選挙に立候補した動機（現代の大義名分「錦の御旗」「男冥利」）と重なる。さらにインテリ階級の重視も彼に立候補を決意させた要因（B）である。他党他派から批判されることを承知していた上で、なお立候補したのは、彼が「既成作家的生活に安住してゐるよりも、たとひ当選しても、落選しても今までとは別な生活を体験すること」を望んでいたことに尽きるように思える（「立候補について」、傍点引用者）。これらの点に留意しながら選挙戦の実際について見ていく。

4

選挙戦が始まり、まず問題になったのは選挙費用である。男子普通選挙の実施にあたり、いくつかの新制度が採用された。例えば供託金制度（衆議院議員選挙法第六十八条）。これにより候補者はまず供託金二千円を納めなければならなくなった。一定の得票数に届かない場合には供託金が返還されないので、候補者の乱立を防ぐ仕組みになっているわけだ。菊池も選挙費用の捻出に頭を痛めていたが、それでも四日には納めたようである（「東京朝日新聞」昭3・2・4）。他の費用は寄付金や前借りした原稿料などで補い（同上）、六千円は準備できたらしい（「東京日日新聞」昭3・2・9）[11]。

選挙戦が始まると文芸春秋社が選挙事務所になった。ここでビラが作成され、有権者への依頼状の発送作業が行われた。ビラは出馬表明の次の日（二月四日）の夜にはでき上がっている。また出馬表明の様子は新聞各紙から大きく取り上げられ、応援申し込みが殺到した。特に人気スターの、水谷八重子、市川猿之助らの申し込みが大きく報じられている。二月七日午後六時から赤羽、三田の小学校で行われた最初の選挙演説会も、多くの聴衆を集め、盛況に終わったことが伝えられた。他の候補者より出遅れた菊池の選挙戦は、こうしてメディアにうまく乗じて遅れを挽回し、さらには勢いをつけていく。

菊池の選挙戦の基本は「文書戦」、「言論戦」である。選挙戦を〈既成〉の政治家のような地盤や金権ではなく、あくまで〈言葉〉を武器に戦うというのだ。それが菊池にとって「一般文芸家の代表として」立候補することの意味である。また〈言葉〉は選挙公約（C）でもある。「検閲制度の改善、出版法著作権法の改正に力をつくしたい」という彼の考えは、〈言葉〉のために〈言葉〉で戦うということであった。

さて、その選挙運動の要である選挙演説会は、毎夜約三ヶ所で行われた。演説会には菊池本人は勿論、応援演説として片岡鉄兵、横光利一、南部修太郎、小島政二郎、高田保らが参加した。またゲスト演説者には武者小路実篤、正宗白鳥といった作家たちや、新渡戸稲造、末広厳太郎、太田正孝、小野清一郎等の学者たちもいた[12]。

菊池の演説は「語調は例のスピードの早いものだが、内外引例多く、ユーモアとウイットに富むだ話」である（「読売新聞」昭3・2・13）。それに対して「五分をき十分をきに聴衆の顔は

笑にくずれ拍手を送る」り、「四十分間、千二三百の聴衆は前後十三回拍手を送る」反応を見せる（同上）。では演説において何が語られたのか。例えば新聞記事は次のように伝えている。

僕が安部氏と共に幸に議会に送られることが出来れば、社会民衆党員たる僕としては党首たる安部氏の拡声器の役をつとめ、勤労無産階級、知識階級、読書階級、有産階級のために調整的代弁の役を果たし、一方議会の醜状等、縦に横に描破して、その点からは議会の改造に資したいと思ふ、この小説家としての筆を持つてるといふことは、千の候補者の中僕だけに備はる唯一の武器である

（「読売新聞」昭3・2・16）

議員活動の中心も〈言葉〉である。ここからも菊池が、小説家の職業的特性を〈言葉〉を用いる力にあると考えており、その力を信じていることが窺える。彼は、「議会の改造」＝政治改革に対して小説家の〈言葉〉が有効だと考えているのである。

ところで、菊池は、郷里・高松のある香川からではなく、東京から立候補した。選挙区は一般的に、地盤の力が強く作用する出身地が選ばれる（被選挙権に関する住所規定は特にない）。菊池は立候補に際して「郷里へ帰れば問題無く自信があります」と述べるように、地盤の影響力に自覚的である。また選挙法の改正によって有権者が従来の四倍になったが、その多くが無産階級であり、無産政党から立候補することで彼らの支持を多く集めることができる、ということも彼の考えの中にあった（「会心の肉薄戦」、「サンデー毎日」昭3・3・11）。だが彼が期待するのは基本的には、Bでまとめたような「読書階級」と「文芸愛好家」であり、そのようなインテリ階級は、香川よりも東京のほうが多いと考えられる[13]。この場合、自分の作品を読み理解を示す読者が、自分の政策に賛成し投票する有権者にスライドされる。

十万の有権者中、少くとも、一万や一万五千の文学愛読者はあるだらう。自分の小説のどの一つかはよんでゐてくれるだらう。その人達の半分、少くとも三分の一位は、自分に入れてくれるだらうと思つた。これ、立候補を決心した理由の二つ。

（前掲「会心の肉薄戦」）

このように〈自分の読者〉を〈自分に投票する有権者〉として想定すれば、無産階級からの票は期待できない。彼らはインテリ階級（＝〈自分の読者〉）ではないからである。従って、当選を目指すならば、選挙区はインテリ階級の多い東京でなければならない。菊池の選挙戦は確かに、いわゆる地盤に依拠した〈既成〉の戦い方ではなかった。しかし、安部磯雄の応援演説をした久米正雄に倣って言えば、菊池は東京という「文壇的地盤」に依拠して戦っていたのである（「東京日日新聞」昭3・2・2）。

読者観の問題はこれに限らない。菊池は聴衆について、「私の演説会にはモボ、モガばかりだなんていつてるものがあつた

がありやうそです、昨夜も赤羽小学校は八百人の入りでしたが、女は五六人でした、多くは真面目な有権者、顔色でこりや相当な票が入るなと思つた」（「東京日日新聞」昭3・2・9）と語る。安部に続き菊池を応援した久米正雄も、モボ・モガばかりという評判を否定し、「それどころか案外おぢいさん達の多いのに、われくは寧ろ一驚を喫してゐるくらゐだ」（「読売新聞」昭3・2・16）と述べる。そもそも選挙権のない女性に票の期待はできない。そして「真面目な有権者」を求める側としては、モダン・ボーイ、モダン・ガールがやってくることで、菊池の立候補がメディアから「気まぐれの売名のとチヤラか」されてしまい（同上）、むしろ候補者のマイナス・イメージになりかねなかった。この時点で菊池（たち）が対象として想定する有権者は、インテリの成人男性なのである[14]。

5

しかし、菊池（たち）が想定する有権者がいかなるものであれ、選挙演説会が盛況だったことには変わりない。菊池によれば十三日間で二万五千人に演説ができたという（「会心の肉薄戦」）。このように文学者と読者が出会う場は、先に触れたように、文芸講演会という形で実現されており、この頃の彼らにとって、選挙演説会と文芸講演会との距離はそう遠くなかっただろう。文芸講演会について、菊池は以前に次のように述べたことがあった。

だが、同じ題目でもその時その時に依つて、出来不出来があり話の内容も半分以上違つたりしてゐる。だが、聴衆の善悪は直ぐ此方の気持に、反射する。此方が、警句なり諧謔を云つたときに、応じてくれないと、スツカリしよげてしまふ。だが、よく此方の云ふことを理解して、響の物に応ずる如く、反射してくれる聴衆だと、此方も脂がのつて、よく喋べれる。（略）

聴衆は何と云つても、同種のものがいゝ、たとへば学生ばかりとか、女ばかりとか、教師ばかりとか。（略）だが、聴衆と云ふものは、理論を云つてゐるときよりも、例を話してゐるときに、謹聴してゐるものだ。そして高尚な理論よりも卑近な理窟や例話を欣ぶものである。然し、さうばかり高をくゝつていゝ加減な話をしてゐると、多くの聴衆は明に不満を感じてゐるのだ。

聴衆では、東京の聴衆が一番恐い。いゝ加減な話をして軽蔑されてもつまらないから、東京での公開講演には、殆ど出たことがない。それかと云つて、準備をして、いゝ講演をしたいと思ふほど、講演に興味がない。高級な聴衆は、お座なりの講演には可なり反感をいだくらしい。だから、お座なりの講演をして、反感をいだかれる位なら出ない方がいゝ。

然し、自分は講演は、可なり真面目にやる方である。自惚れかも知れないが、先づ何処でも聴衆を満足させたと云ふ自信を持つてゐる。

われ〳〵の講演で、一番の取柄は、所謂講演口調、説教調子、その他の気取（アフェクティヨン）りがないことだらう。

（「講演」、「文芸春秋」大14・2）

社会革命において「理論」よりも、「実行」と「研究」を重視する菊池らしく、聴衆の反応や講演のスタイルについて述べている。選挙演説会に対しても、まずは同じような気持ちで臨んだと考えられる。だがそこでは、「東京の聴衆」、つまり、演説内容を的確に批評する（と予想される）「高級な聴衆」が相手となる。聴衆の質は、そのまま読書階級、知識階級という読者の質の問題にスライドするため、それ相応の演説を行わなければならない。また選挙演説は、有権者の支持を広く集め、それによって多くの票を獲得することを目的とするから、より聴衆に寄り添う形で、〈気取り〉ながら、実行されることになる。

演説会では、演説を行う候補者と、それを視聴する有権者が互いに向かい合う。演説者は聴衆の「反射」＝反応に影響されながら演説を行う。このとき〈言葉〉を言い間違えても、作品を書くときのような直し（取り消し）はできない（訂正は別の〈言葉〉で行われる）。そのため演説会では常に〈言葉〉が生産されていく。一方、聴衆も演説者の〈言葉〉に影響されながら反応する（話がつまらなければ、読書を中断するように、あくびをしても、退場しても一向に構わない）。従って演説会での演説者と聴衆の影響関係は、一方的ではなく双方向なものである。このように互いが、反応に反応しあいながら全体の場を生成していく〈ライヴ感〉が、演説会にはある。

その〈ライヴ感〉が演説者である菊池に、普段とは異なる緊張と興奮をもたらした。投票日を次の日に控えた彼が次のように語ったことは、それと無関係ではないはずである。

あるだけの努力をもつて奮闘しました、おかげでこれまで書いたどの小説よりも遥かに大きな手ごたへがあつたと信じます、これがもし単に空景気であつたとしたら人生観の上の信頼を全く破壊されてしまはねばなりません、だが恐らくさうでないことを信じて心静かに明日を待つばかりです

（「戦終へて」、「東京朝日新聞」昭3・2・20）

創作を本業とする彼が、選挙戦を通じて「これまで書いたどの小説よりも遥かに大きな手ごたへがあつた」と語る。これは菊池の中で、小説を書くことと、選挙を戦うことが（少なくともこの時点では）等価にみなされていたことを示しているのではないか。だとすれば、「文学」と「政治」は、もはや二項対立で優劣が判断される問題ではない。小説以上に選挙に「大きな手ごたへ」を感じたのは、そこで読者＝有権者と共有した〈ライヴ感〉によるものであろう。菊池が「大きな手ごたへ」を感じたとき、当選を信じて疑わなかったことは想像に難くない。

しかし結果は落選だった。菊池はその原因を、立候補の「立ち遅れ」と、「新聞紙の黙殺」の二点を挙げて説明する。特に

後者については、「東京朝日、国民、及び読売などの断片的評論に於て、自分を冷嘲し揶揄した」（「敗戦記」、「文芸春秋」昭3・4）、「予想記事に於て、全然黙殺されたことは非常な打撃であつた」（同上）として、具体的な新聞記事を挙げて批判している。だが先に述べたようにその「立ち遅れ」を挽回するほど、新聞各紙はその立候補を大々的に取り上げていた。彼の選挙戦についての記事も投票前日までほとんど毎日見られた。演説会の中止が多かった他の無産政党の候補者に比べれば、順調なものであったと言える。菊池のメディア批判は落選後に活字化されているので、そうした菊池の態度には落選の影響が大きいと考えられる。菊池がそのように選挙戦を振り返るとき、菊池の「言論戦」とは他党他派の候補者に対してではなく、メディアに対するものであったと言えるかもしれない。

ともかく結果として、読者＝有権者に対する期待は裏切られた形になった。

だが、結果は御存じの通り。新有権者は、結局旧有権者の延長であることが分り、旧式の戦法がまだ大きな力を持つてゐることが分つた。然し、全然素人の集まりで、言論、文章のみを以て戦ひ、既成政党の連中に肉薄することが出来たのは、会心のことでないこともない。殊に、自分に投票して呉れた人達は、有権者中最も文化的に進んだ人達で、精神的には一票他の三四票に当たることを思へば落選しても、さう不愉快ではない。

（「会心の肉薄戦」）

また文学愛好者と云ふものは、その家の息子や娘などに多く、戸主の文学愛好者は極めて少いものであることが分つた。

（「敗戦記」）

こうして菊池は〈読者〉を〈再発見〉する。菊池からすれば、新有権者も〈既成〉の地盤を引きずっているように見えるのだろう。逆に自分に投票した有権者は「最も文化的に進んだ人達」で、「精神的には一票他の三四票に当たる」という。第一区の最多得票が、横山勝太郎（東京弁護士会長や立憲民政党代議士会長などを務めた）の一万三三〇五票だから、菊池の五六八二票を三倍したものがそれを上回る。小説と選挙を等価に置き、「文学」と「政治」の二項対立を超えていくかのように見えた菊池は、敗戦後、再び「精神的」な優位性を主張する「文学」へと帰っていく。選挙戦を通じて菊池は〈文学〉を〈再発見〉する。そして自身が語ったように、「今までとは別な生活を体験すること」になったのである。

また選挙によって〈再発見〉したのは、立候補した菊池だけではなかった。彼を応援していた横光利一は、選挙戦後間もなく、当時熱海に住んでいた川端康成に次のような書簡を宛てている（昭和三年二月二十一日）[15]。

へとへとになつたので、手紙ずぼら、赦されよ。
へとへとさ、お話にならず。
選挙運動をやつて、良いことをしたのは、急に、絵画が美しく見え出したことと、温泉へつかりたくなつたことと、民衆が赤子に見え出したことと、小学校が、泡みたいに見え出したことと、代議士が馬鹿に見え出したこと。
行きたいが、まだ暇なし。（略）
「われわれ無産党は。」ともう三十四はしやべつた。おかげですつかり無銭湯へは入つたやうな気持ちになり、アタミでもあらうまいと云ふ所。
昨日畑を歩いたら、もう種を蒔いてゐた。
赤子も大つきくなりよるし、犬もふざけ出した。（略）

民衆が、生まれたばかりの長男・象三（昭和二年十一月三日誕生）と同じ、「赤子」に見えるというのだ。横光はここで〈民衆〉と〈芸術〉を〈再発見〉する。さらに「春になつて」（「創作月刊」昭3・3）では、「落選と分つたとき、非常な深さの疲労のまま街をふらふら歩いた。すると、いつも見馴れた額縁屋の絵画が、急に、まことに美しく見え始めた。／「やつぱり、芸術は捨てたものぢやない。」と私は思つた。／翌日から一層私はぐつたりと疲れた。しかし、急に芸術が美しく見え出したので、私は五年前のやうな若い青年に立ち返つた。これは喜ばしいことであつた。／私は家を出て野の方へ歩いてみた。新しく耕された土の上へ、もう種を蒔いてゐる。これもまことに面白く見えて来た。／「春だ。」と思つた。／すると、春もまことに良いものだ、と私は思ひ出した。（略）」と述べている（／は改行）。昭和三年から「五年前」に遡ると大正十二年、その年の一月、菊池寛が文芸春秋社を設立し、「文芸春秋」を創刊する。同年二月、横光はその編輯同人に川端らと共に加わり、五月、「日輪」（「新小説」大12・5）と「蠅」（「文芸春秋」大12・5）を発表する。横光は「解説に代へて」（『三代名作全集　横光利一集』河出書房、昭16・10）の中でこの頃を回想して、「日輪」が「文壇といふ市場の雑誌に掲載された処女作となつた」といい、さらに「新感覚派と人人の私に名づけた時期がこの時から始つた」と記している。つまり「五年前」は、自他共に許すように、横光が作家として本格的な活動を始めた時期であった。その頃の、青年の自分に重ねながら、横光は〈自分〉を〈再発見〉する。

菊池と横光は選挙を限界まで戦うことで、それぞれの文学観に関わる〈再発見〉をした。しかしその後、一方は大衆文芸へ、一方は「純粋小説論」へと向かっていったことが、選挙戦の結果と直結するかどうかについてはまた別の問題になるだろう。

6

昭和五年、第十七回衆議院議員総選挙（投票日二月二十日）が行われた。前回落選した菊池は「総選挙のことなど」（「文芸春秋」昭5・2）で、「自分は絶対に出ないつもりである」と述べている。その理由を、前回は「落選はしたものゝ、自分のやう

な文学者にも社会的信任が相当あることを確め得たし、社会民衆党のためには、相当有力な地盤を作り得たと思ふ。（略）しかし、自分に議会へは入らうと云ふ希望がない以上、二度やることは、余計なことである」（同上）として、立候補しなかった。

再び彼が選挙に立候補するのは、昭和十二年のこと。それも国会議員ではなく、東京市会議員（豊島区・市政革新同盟）の選挙であった（投票日三月十六日）。この時は四五八七票を獲得し、候補者二十六名中一位で当選した（定員六名）。議員活動は市会の出席をはじめとして、水道の予算委員やオリンピックの委員を務めるなど忙しく、戦死者の区民葬の際には市会議長代理で弔詞を読むこともあった。一方、議員として招待された宴会や旅行には一度も行かず、議員としての報酬は革新同盟に寄付したりしたというから（「話の屑籠」、「文芸春秋」昭17・6）、彼の議員時代の生活は、作家活動が主、議員活動が従だったことになる。

次第に菊池の議員活動に対する興味は失せていくが、辞めるわけにもいかず、原稿の執筆時間を割きながら続けなければならなかった。そうして菊池は任期満了となる昭和十六年四月を待ち望むようになるが、選挙が延長（投票日昭和十七年六月十五日）されたことを受け、「革新同盟も解散された今、市会議員たる意味がなくなったわけである」と述べる（「話の屑籠」、「文芸春秋」昭16・6）。もはや彼の政治家としての情熱は冷めてしまった。いや、もともとそのような情熱などなかったのかもしれない。後に菊池は議員生活について「悪いこともしない代りに、いゝこともしなかつた」（「話の屑籠」、「文芸春秋」昭17・6）と振り返り、自分が「市会議員などをやる柄でない」（同上）と判断しているが、そうした考えを先取りするかのように、当選直後、「とにかく、選挙に勝つたことは嬉しかつた。／しかし、市会議員になることは、あまり嬉しいことではない」と語っていた（「話の塵」、「文芸春秋」昭12・5）。菊池にとって、「研究」を行い、それに基いて「実行」する政治参加は、選挙後の議会にあるのではなく、（ライヴ感）に包まれる選挙そのものにある。

では菊池と選挙の関係はその後どうなったのか。彼は選挙に立候補しない代りに、多くの政党政派の候補者の応援演説を行うようになる。それは彼が嫌う政友会から立候補する、犬養健に対しても同様だった。自分が立候補しなくても、懇意に依頼されれば候補者の義理を立てて応援しなければならない――落選した総選挙で熱心な応援を受けた菊池はそう考えたようだ。第十七回の総選挙の応援の様子を記した「応援演説行」（「文芸春秋」昭5・3）には、犬養の他に宮崎龍介、松岡駒吉、吉田実、西尾末広、鈴木文治、内ケ崎作三郎、さらには改造社の社長・山本実彦の名前も見られる。菊池は「明日（二月十二日）八時に、大阪を立ち、長駆鹿児島に行き、山本実彦を応援するつもりである」（「応援演説行」）と記している。菊池と同じく雑誌社の社長だった山本実彦は、なぜ立候補し、どのような選挙戦を戦ったのか。その問題については稿を改めなければならない。

【注記】

1　なおこの選挙において、菊池以外で立候補した文学者は管見では以下の通り。内ケ崎作三郎（宮城県一区・立憲政友会）当選、石坂養平（埼玉県二区・立憲政友会）当選、伊藤痴遊（東京府三区・立憲政友会）当選、佐藤肋骨（東京府五区・立憲政友会）当選、樋口龍峡（長野県三区・立憲民政党）当選、小泉三申（静岡県二区・立憲政友会）当選、尾崎行雄（三重県二区・中立）当選、鶴見裕輔（岡山県一区・中立）当選、犬養毅（岡山県二区・立憲政友会）当選、古島一雄（東京府二区・立憲政友会）落選、藤森成吉（長野県三区・日本労農党）落選、相島虚吼（大阪府五区・立憲政友会）落選、大山郁夫（香川県二区・日本労農党）落選。主な参考文献は、日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』（講談社、昭52・11～昭53・3）、財団法人公明選挙連盟編集兼発行『衆議院議員選挙の実績―第1回～第30回―』（昭42・3）など。

2　引用文中の旧漢字は新漢字に改め、仮名遣いはそのままにした。但しルビは一部を除いて省略した。以下新聞記事を除き、菊池の文章の引用はすべて『菊池寛全集』（高松市菊池寛記念館、平5・11～平7・12）、同補巻（武蔵野書房、平11・2～平15・8）による。

3　第十六回総選挙当日における東京府の有権者は、人口四八九万七四〇〇人中、八五万三三二二人。全国では人口六一六五万九三〇〇人中、一二四〇万八六七八人。有権者は第十五回に比べて約四倍になっている。『衆議院議員選挙の実績―第1回～第30回―』（二十頁）参照。

4　但し立候補を表明する前から、安部磯雄の応援演説を行う形で選挙には関わっていた。その演説が「そんなにいやなもんではな」かったことも、立候補の動機として挙げている（「東京日日新聞」昭3・2・9）。

5　この小特集に寄せられたもののうち、武者小路実篤は「文士の代表菊池君」において、菊池の立候補に感心しない態度を取りながらも「しかし同君は文壇の内から議員を出すとすれば唯一無二の人だと思つてゐる。（略）山本有三君ならその熱心さである所まで文士のために働ける人かと思ふが、しかし一人出すなら菊池君に限る。（略）今度もし落ちてもいつかは議員になる人だと思ふ」と述べている。彼が言うように、後に山本有三は参議院議員となり（第一回参議院議員選挙、投票日昭和二十二年四月二十日）、菊池寛はこの選挙で落選したが昭和十二年の東京市会議員選挙に立候補して当選している。

6　特に関東大震災後に誕生した山本権兵衛内閣が普通選挙実現を政綱に含めたことは大きな反響があったという。河野密『日本社会政党史』（中央公論社、昭35・9　四四頁）参照。

7　実際、協会の中心的な事業は「毎月の例会のほかに、機関誌とパンフレットの発行や講習会・講演会の開催など、研究・啓蒙活動であった」という。住谷悦治・山口光朔・小山仁示・浅田光輝・小山弘健編『講座・日本社会思想史3　昭和の反体制思想』（芳賀書店、昭42・5　三一頁）参照。

8　フェビアンの名称は古代ローマの名将ファビウスに因む。直井武夫「英国フエビアン協会創立の前後」（「社会主義研究」大13・6）参照。なお名古忠行『フェビアン協会の研究』（法律文化社、昭62・3　一七四頁）によれば、「フェビアン主義の独自性は、それが社会再建の思想であり、破壊ではなく建設と秩序の社会主義であったところにある。（略）フェビアン主義は、資本主義の発展と成熟が生み出した新しい社会層、すなわち知的職業人、専門的テクノクラートの社会主義であった。それは、体

制をいかに合理的に形成し運営するかの思想、社会の科学的プランニングにとりくむ思想であった」という。

9 「社会主義研究」（大13・6）の「会報」に掲載された会員は次の通り。安部磯雄、秋田雨雀、青野季吉、石川三四郎、直井武夫、菊池寛、小泉鉄、小林輝次、中村吉蔵、本間久雄、ミス・デントン、山崎今朝弥、馬島僩、山崎一雄、小川未明、島中雄三、藤森成吉、藤井真澄、宮嶋新三郎、新居格、吉江喬松、川原次吉郎、松下芳男、稲垣守克、木村毅、片山哲、澤田謙、茂森唯士の二十八名。その後、今野賢三、江口渙、福田正夫、前田河広一郎ら十六名（大13・7）、神近市子、中西伊之助ら四名（大13・8）、大宅壮一、千葉亀雄、村松正俊ら十一名（大13・11）が加入。「協会消息」（大13・12）にはその後三十名増えたこと、「本部だより」（大14・2）には小山内薫、山本宣治らを加え大正十三年中に会員が百名に達したことを伝えている。

10 綱領の発表は大正十五年十二月五日。引用は安部磯雄「社会民衆党パンフレット」（社会民衆党本部、昭2・9・三版）による。

11 それでも選挙費用が十分だったわけではない。というのも菊池は後年、文芸春秋社の「危機」のひとつに、この選挙を挙げているからである（「十五年に際して」、「文芸春秋」昭12・1）。「この時、少し困ったので、株式会社にしたのである。（略）しかし、株式会社にしたことは、賢明な策であり、自分の私経済と分離させたことは、文芸春秋社が今日確固たる経済的基礎を築いた一つの遠因である。」選挙が文芸春秋社の株式化の要因だったといえるだろう。

12 菊池以外の候補者の場合も含め、応援演説を行った文学者は数多い。「普選立候補者応援演説出場文壇人芳名録」（「読売新聞」昭3・2・20）には、「正宗白鳥、武者小路実篤、上司小剣、久米正雄、江見水蔭、中里介山、広津和郎、田中純、久保田万太郎、井波清治、関口次郎、南部修太郎、小島政二郎、岡本一平、前田河広一郎、青野季吉、木村毅、高田保、片岡鉄兵、横光利一、柴田勝衛、山田清三郎、葉山嘉樹、本荘可宗、金子洋文、佐々木孝丸、林房雄、今野賢三、蔵原惟人、柳原白蓮、その他」とあり、相当の文学者が選挙演説を行ったことが窺える。勿論、立候補も応援もしなかった文学者は多い。

13 「無産政党座談会」（「文芸春秋」昭3・3）において、労農党は香川県では「一番確実」に成績をあげることが予想され、無産政党の影響力が強いことが示されている。また同じ座談会では馬場恒吾が「人気に依つて動くのは都会地動くけれども、地方ではまださうは行かぬと思ふ」と述べているように、人気作家の菊池が必勝を期すならば、やはり選挙区は東京でなければならなかった。

14 「この時点で」というのは、菊池が立候補に際して「婦人参政権があれば、きつと可なりの高点で当選するだらうと思ふ」（「立候補について」）と述べているためである。〈自分の読者〉である女性読者を〈自分に投票する有権者〉として仮定することは自由だが、婦人参政権が認められていない当時、実際の女性有権者はありえない。〈自分の読者〉がインテリの成人男性に限定されていくのは、選挙戦が始まり実際的な運動を行うことで、菊池が当選を強く望むようになったからであろう。

15 横光の文章の引用はすべて『定本横光利一全集』（河出書房新社、昭56・6～昭62・12）による。漢字・仮名表記は注2に同じ。

（九州大学大学院修士課程二年）